

## 明末『四書』注釈書日本伝来後の受容と影響

——『四書知新日録』を中心に——

鍋島亞朱華

### 一、はじめに

『四書』は朱子学の中心的な位置を占めており、宋明以来の儒学的重要な經典でもある。日本に伝わってからは、江戸時代の漢学者の研究の主軸でもあった。中国においては、陽明学派の出現以降『四書』の解釈は以前にも増して多様性を持つこととなった。明末の多種多様な『四書』注釈は、ほぼ時間差なく直接江戸初期の日本へ伝わっており、中国では逸失しているものが日本に現存している場合が多くある。本論で扱う明人鄭維嶽（字申甫、<sup>①</sup>別号孩如、生卒年未詳、万曆四年举人）の『四書知新日録』も佚書の一つである。

『四書知新日録』には明儒の注釈が多数含まれており、王陽明以降の二十八名の明末思想家の『四書』に関する著作が引用され、中には所謂修証派の李見羅（材）、湛門派の許敬菴（孚遠）、現成派の羅近溪（汝芳）などの多様な言説ある。林羅山『大学諺解』、佐藤一斎『大學欄外書』、大塩中斎『古本大學刮目』、吉村秋陽『大學賸義』等はこの書物を通して明儒の学説を引用しており、江戸期においては明末の学術思想を知る上で極めて便利な書物であったことが伺える。<sup>②</sup>

本論は『四書知新日録』を中心に、明末の『四書』注釈が日本に伝わった状況の一端を論じてみたい。まずは現存するテキスト三種を比較分析し、次に「大学」の部分を中心にその内容を検討する。明末の『四書』解釈の多様性の一端を浮き彫

りにした上で、江戸期における明末四書学の受容状況を解明したい。

## 二、『四書知新日録』について

『四書知新日録』は中国での現存は確認できないが、『經義考』及び『千頃堂書目』でその形跡を確かめることが出来る。『經義考』卷二百五十七には「鄭氏維嶽 四書知新日録 三十七卷 未見」とあり、『千頃堂書目』卷三には「鄭維嶽 四書知新日録三十七卷 福建南安舉人萬曆中官靖府同知」とある。『經義考』の著者朱彝尊（一六二九―一七〇九）は実物を見ていないが、『四書知新日録』は三十七卷であると記載しており、また、『千頃堂書目』からは鄭維嶽は福建南安の人であることが分かる。

作者の鄭維嶽については、『明史』に伝記はないが、卷九十六に「鄭維嶽易經意言六卷」及び「鄭維嶽四書知新日録三十七卷」の記載があり、ここでも『四書知新日録』は三十七卷であると確認できる。

以上を手掛かりに『福建通志』<sup>(3)</sup>を紐解くと、卷五十一には以下のように記載されている。

鄭維嶽、字は孩如、万曆丙子（四年）の挙人。五河県を管理し、方田法を制定、淮河を疎通して、実績を上げることが出来たため、曲靖同知に昇進した。『易經密義』などを著し、刊行した。

鄭維嶽、字孩如、萬曆丙子舉人。知五河縣、立方田法、濬淮河、皆有善蹟、陞曲靖同知。著有『易經密義』諸書行世。

また、『閩中理學淵源考』卷七十七<sup>(4)</sup>には、

鄭維嶽、字申甫、別號は孩如、南安の人。…維嶽は聖学を探求し、禪にも通じ、經書を講じると、論弁が尽きることが

なかった。…『知新録』、『四書正脈』、『易經密義』、『意言』、『禮記解』などの著書あり。（閩書 南安邑志）  
鄭維嶽、字申甫、別號孩如、南安人。…維嶽究心聖學、兼通禪理、每講經、論辨無窮。…有《知新録》、《四書正脈》、《易經密義》、《意言》、《禮記解》諸書。（閩書 南安邑志）

とある。

以上が管見の限りでの鄭維嶽についての伝記資料である。ここで明らかとなったのは、鄭維嶽は万暦四（一五七六）年の挙人であり、『知新日録』以外にも『四書正脈』、『易經密義』、『意言』、『禮記解』などの著書を残していることである。

現在、上記の著書の中で確認できるものは『四書知新日録』のみであり、現存しているテキストは少なくとも四種ある。<sup>(5)</sup>  
書影【図一】～【図四】は文末に附してある。

- (1) 『鐫溫陵鄭孩如觀靜窩四書知新日録』六卷八冊明（一五九六年）刊【図一】

（國立公文書館内閣文庫所藏）

- (2) 『鐫溫陵鄭孩如觀靜窩四書知新日録』六卷十冊江戸刊（木活）【図二】

（國立公文書館内閣文庫、靜嘉堂文庫所藏<sup>(6)</sup>）

- (3) 『新鐫孩如鄭先生觀靜窩四書知新日録』二三卷六冊明版【図三】

（上智大學國文學科所藏）

- (4) 『新鐫溫如鄭先生觀靜窩四書知新日録』六卷九冊（存四冊）【図四】

明潭城余彰徳刊本？<sup>(7)</sup>

（國立臺灣大學圖書館、國家圖書館漢學研究中心所藏）

書名は、版心には『四書知新日録』或いは『知新日録』とあり区別しにくいため、いずれも一葉目首行の記載に拠った（下

線は筆者による)。同じ『四書知新日録』だが、わずかに違いがあることが分かる。

(1)『鐫溫陵鄭孩如觀靜窩四書知新日録』と(2)『鐫溫陵鄭孩如觀靜窩四書知新日録』、は書名のみでなく、内容も同じであるが、(1)は明版、(2)は江戸の翻刻版である。内閣文庫の目録には、(1)の明版は林氏所蔵、(2)の江戸翻刻版は高野山釈迦門院所蔵となっている。共に六巻で、(1)は八冊、(2)は十冊となっている。版本の様式を比べると、以下の違いがある。

表一、『鐫溫陵鄭孩如觀靜窩四書知新日録』二種比較表

版本	(1) 明版	(2) 江戸翻刻版
版式	十三行三十字 有界線 左右雙邊欄 單魚尾	十一行三十字 無界線 左右雙邊欄 雙魚尾
刊記	版心「四書知新目錄 大學一卷」 卷首封面裏	版心「四書知新目錄 大學一卷」
序文	「溫陵孩如鄭先生觀靜窩四書知新日録 〔丙申(一五九六) 冬萃慶堂余泗泉梓〕」 序文末	無 序文末
記載	「甲午(一五九四) 孟冬之吉觀靜窩主人孩 如子鄭維嶽書于芋原舟次」	同
版式	序文為抄本、無邊欄、無版心	序文為刻本、有邊欄、有版心

表1から分かるように、(1)が八冊で(2)が十冊となっているのは、各頁の行数と字数が異なっているためであり、内

容に異同があるわけではない。(1) 明版は刊記によると丙申年、つまり万曆二十四(一五九六)年の冬に刊行されており、序文はその二年前の甲午(一五九四)年に書かれている。なおこの序文は抄本であり、訓点がつけられている。(2) 江戸期翻刻版は版式は(1) 明版と違い、界線がなく、和刻本でよく見る版式である。刊記が附けられていないため、刊行の年代が特定できない。序文の内容及び序文末尾の記載年は同一であるが、こちらは抄本ではなく、刻本である。

(3) 《新鐫孩如鄭先生觀靜窩四書知新日録》も明版だが、書名に「新鐫」の二文字があり、刊行時期が(1) 明版より遅いことが伺える。(1) と(3) を比較すると表二のようになる。

表二、(1) 『鐫温陵鄭孩如觀靜窩四書知新日録』(明版) と(3) 『新鐫孩如鄭先生觀靜窩四書知新日録』(明版) 比較表

版式	刊記	序文	記載	版式
1. 『鐫温陵鄭孩如觀靜窩四書知新日録』 十三行三十字 有界線 左右雙邊欄 單魚尾 版心「四書知新日録 大學一卷」	卷首封面裏 「温陵孩如鄭先生觀靜窩四書知新日録〔丙申(一五九六) 冬萃慶堂余泗泉梓〕」	序文末 「甲午(一五九四) 孟冬之吉觀靜窩主人孩如子鄭維嶽書于芋原舟次」序文為抄本、無邊欄、無版心		3. 『新鐫孩如鄭先生觀靜窩四書知新日録』 十一行二十四字 有界線 左右單邊欄 無魚尾 版心「知新日録 一卷大享」
	卷末 「萬曆丙申(一五九六) 歲孟火禾温陵聚奎室謹誌」	序文末 「丙申(一五九六) 孟春之吉觀靜窩主人孩如子鄭維嶽書于適然軒」		序文為刻本、有邊欄、有版心

表二で明らかのように、(3)『新鐫孩如鄭先生觀靜窩四書知新日録』は万曆二十四(一五九六)年春に完成、同年に出版されており、(1)『鐫溫陵鄭孩如觀靜窩四書知新日録』の刊記と僅か数か月しか違いがない。序文末の年代は違うが、序文の内容は同じである。ただ、本文の内容については(1)と異なる部分があり、このことについては次の節で述べる。

(4)『新鐫溫如鄭先生觀靜窩四書知新日録』は、九冊の内、「中庸卷二」、「論語卷四」、「孟子卷六」の四冊のみ残っている状態のため、首巻と末巻が欠落しており、序文や刊記の比較ができず、刊行時期の特定もできない。このテキストは、台湾国家図書館漢学研究中心の記載では、日本で明の潭城余彰徳版に拠って翻刻したものとしている。台湾大学蔵本については来歴不詳。

表三、(3)『新鐫孩如鄭先生觀靜窩四書知新日録』(明版)と(4)『新鐫溫如鄭先生觀靜窩四書知新日録』(日本翻刻版?)  
比較表

刊記	序文	記載
版本 版式 (3)『新鐫孩如鄭先生觀靜窩四書知新日録』 十一行二十四字 有界線 左右單邊欄 無魚尾 版心「知新日録 一卷大序」	卷末 「萬曆丙申(一五九六)歲孟火禾溫陵聚奎室謹誌」	序文末 「丙申(一五九六)孟春之吉觀靜窩主人孩如子鄭維嶽書于適然軒」 ※序文為刻本、有邊欄、有版心
版本 版式 (4)『新鐫溫如鄭先生觀靜窩四書知新日録』 十一行三十十字 無界線 左右雙邊欄 雙魚尾 版心「四書知新日録 中庸」	欠葉	欠葉

以上がテキスト四種の版式及び内容についての比較である。要約すると、まず確認できることは、(1)は一番最初に書かれたものであり、(2)は(1)を翻刻したものである。(3)は(1)の後に改訂出版され、(4)は日本で翻刻された可能性がある。

上述の『経義考』、『千頃堂書目』の「三十七卷」という記載と比べると、このテキスト四種の巻数はどれ一つ当てはまるものがない。その違いは内容の違いによるものかもしれないが、毎頁の行数、字数の違いによるものかもしれないが、現存の資料では検証ができない状況である。

### 三、『四書知新日録』の編纂方法及び内容について

ここで『四書知新日録』の編纂方法について検討する。分量が多いため、本論では「大学」を例に、その編纂方法を分析し、テキストの内容の比較を行った。

作者鄭維嶽は、『四書知新日録』「大学巻」を編纂する時、まずは「大学」を章と節に分け、章と節ごとに明儒の注釈を列挙し、自身の見解を述べている。引用されている明儒は二十名に及び、引用順に並べると次のようになる。

許敬菴（孚遠）、王陽明（守仁）、尤西川（時熙）、高中玄（拱）、湛甘泉（若水）、羅近溪（汝芳）、徐匡嶽（即登）、徐岩泉（？）、焦漪園（竑）、蘇紫溪（濬）、牛春宇（？）、姚承菴（舜牧）、沈覺齋（？）、李九我（廷機）、錢緒山（德洪）、王龍溪（畿）、黃癸峯（？）、夏古訥（？）、袁了凡（黃）、薛中離（侃）<sup>8</sup>。

以上、何名か詳細が分からない者以外は、全て王陽明以降の明代中期～末期にかけての思想家である。作者は何故自分自



身と同時期の思想家の注釈をこれだけ多く集めたのだろうか。その理由について、鄭維嶽は序文において次のように述べている。

『知新日録』は、何故「新」というのか。それが「故」より出たものだからである。「故」より出たものでないのは、「詭」と謂い、「新」とは謂わない。道家の所謂「識神」がそうである。朱子の『集註』は今から見れば「故」であるが、「故」ではない。『四書』の古文が「故」である。私は幼いころより『四書』の古文を読み、少ししてから朱子の『集註』へと読み進み、しっかりと覚えこんでいった。（『集註』以外に）他のものを聞かず、他の注釈を覚えないう程となったが、疑問を覚えるようになった。…王陽明の『伝習録』を読み、以前の疑問が明らかになっており、そこで始めて「温故知新」の説を信じるようになった。もし朱子の「故」説がなければ、陽明の「新」説を知ることにはなかったであろうし、『四書』古文の「故」説がなければ、朱子の説に疑問を感じることもなかっただろう。…陽明先生は已むを得ず疑問を提起したのであって、（奇をてらつて）新説を求めたわけではない。…身内の次世代から疑問が提起されたので、朱子の故説を示し、朱子の説を補正できる新説を次に掲げ、自分の見解も附したが、これらの説を折衷したのではない。

知新日録者、何新？由故而出也。不由故出者、謂之詭、不謂之新。道家所謂識神是也。朱晦翁《集註》、故也、《集註》又非故也。四書古文、故也。吾少而讀《四書》古文、稍進而讀晦翁《集註》、溫而熟之矣。耳無異聞、心無異注、已而乃有疑焉。…已而讀王陽明《傳習錄》、乃昔所疑而見者焉。余始信溫故知新之說。余非晦翁之故、無由知陽明之新；余非《四書》古文之故、無由起晦翁之疑。…陽明先生不得已而有言也、彼非求新也。…窩中兒姪輩問疑義、余示以晦翁故説、諸新説可補正晦翁者、余稍次焉、間亦附以己見、余非敢折衷之也。

上の引用から分かるように、『知新日録』の書名は「温故知新」に由来する。鄭維嶽は「故」より出たものでなければ



「新」とは謂わないと主張する。つまり、「新」たは無から創造されるものではなく、元となるものがなければならぬと言  
うのである。『四書』について言えば、明代の読書人にとっては、朱子の『集註』は当代の様々な注釈と比べると「故」と  
なる、しかし「古文」（『禮記』『大學』）に比べると『集註』は「故」とは言えない。鄭維嶽はまず『四書』の古文を学び、  
その次に朱子の『集註』を読んでいる。そして『集註』をしつかり覚えこんでもなお疑問に感じることがあった。しばらく  
してから『伝習録』を読んで疑問を解くことが出来たために「温故知新」の説を信じるにいたったという。注目すべき点  
は、鄭維嶽はそのために陽明学に転向していないことである。彼は「故」があるがゆえに「新」が生まれ、「新」とは故説  
を補正する役割があると認識している。ここで興味深いのは、文中では作者の読書の順序も明らかになっていることであ  
る。

以上のような理由で、作者は『知新日録』の中では全編において朱子に言及し、また、諸説を並列してはいるが、自分は  
朱子の説を折衷している訳ではないと強調している。つまり、彼が先賢や同時代の学者の説を採り入れるのは、これらの  
「新説」が朱子の説を補正できるからであり、また、今現在の「新説」が将来の「故説」となり、後世の役に立つと考えた  
からである。これが『知新日録』を編纂した目的であった。

ここで『四書知新日録』『大學卷』の編集順序を見ていく。「大學卷」に目次はなく、順序は以下のようになっている。

- (1) 「序」
- (2) 「大學古本 依許敬菴分爲六章」
- (3) 「石經大學」
- (4) 「大學之道全章」
- (5) 「知止而后有定章」
- (5-1) 「物有本末節」

- (5-2) 「古之欲明明德於天下者節」
- (6) 「康誥曰克明德章」
- (7) 「盤銘章」
- (8) 「邦畿千里章」
- (9) 「聽訟吾猶人章」
- (10) 「所謂誠其意者章」
- (11) 「所謂修身在正其心者」
- (12) 「齊家章」
- (13) 「治國章」
- (14) 「平天下章」

この編集順序からも『四書知新日録』の特徴が読み取れる。作者は「大學古本」と「石經大學」を収録し、それぞれに対して注釈を引用したうえで自分の見解を述べている。鄭維嶽は「大學」のテキスト及びその章分けについて、許敬菴が「大學古本」を採用し、六章に分けたことに賛同を示しているが、(3)は「石經大學」、(4)「大學之道全章」以下は「大學」の章分けも内容も、完全に朱子の「大學章句」に拠っている。つまり『四書知新日録』は「大學古本」、「石經大學」、「大學章句」という三種の明代末期に流通していたテキストを並列させたのである。いずれか一つのテキストを選ばないという立場は、同時代の学者たちがそれぞれ自分が考えるテキストを選び、さらには改本を作っていた状況から見ると、かえって特色と読み取ることが出来るだろう。

朱子が『禮記』の「大學」を改訂し「大學章句」を成してから、「大學」の改本の問題は学术界において重要な議題の一つとなった。王陽明が「古本大學」へ戻すことを主張してから、改本は少なくなっていく一方、偽「石經大學」のような

テキストが出現することもあった。いずれも「完全な形」の「大學」を求めたための産物である。鄭維嶽の時代は主にこの三種のテキストが並行していた時代であった。各々自分が正しいと考えるテキストを用い、それに拠って注釈を施し、自らの意見を述べる。その中で鄭維嶽は許敬菴の説を認めながら、他の二種のテキストも収録したことは、序文の中でいう、私は晦翁の故説を示し、その説を補正できる新説を次に掲げるといふ立場からだろう。

なお、前節で(1)『鐫溫陵鄭孩如觀靜窩四書知新日録』と(3)『新鐫孩如鄭先生觀靜窩四書知新日録』の内容の違いについて触れたが、(3)『新鐫孩如鄭先生觀靜窩四書知新日録』は(2)「大學古本依許敬菴分為六章」と(3)「石經大學」を削除している。「石經大學」については、鄭申甫も後から「石經大學」を偽作であると考え、削除した可能性が推測できるが、文中には説明がなされていないため、理由は確認できない。従って何故賛同していた「古本大學」の部分までも削除したのかということについては、まだ議論の余地がある<sup>10)</sup>。

以上の論述を整理すると、『知新日録』について現在確認できることは、(一)中国には現存せず、作者鄭維嶽は福建南安の人である。(二)中国ではテキストは少なくとも二種があり、この二種共に日本に伝わり、江戸時代に翻刻されている。(三)その編纂は「溫故知新」の精神に則り、朱子と陽明の説の両方を探り、三種の「大學」テキストを並列させている。大量の同時代の学者の四書注釈を引用しているのは、自身の学説を支えるためではなく、後世の疑問を解くためである。

#### 四、『四書知新日録』成立の時代背景

明末の四書解釈には特徴的な価値観と学術背景があるが、その状況を述べる前に先ずは「四書学」の発展状況を見ていきたい<sup>11)</sup>。

朱子が『大學』、『論語』、『孟子』、『中庸』に校訂して注釈をつけ、『四書』として打ち出した後、明代の前半期までの学

術界は朱子の『章句』、『集註』、『或問』の体系と観点をそのまま受け継いだ状況であった。例えば真徳秀『四書集編』、趙順孫『四書纂疏』、倪士毅『四書輯釋』などの新たな注釈が出たとしても朱子の学説を踏襲して整理を加えたものが主であった。

趙順孫は『四書纂疏』の序文で次のように述べている。

朱子先生の『四書』注釈は、その意は精密であり、その語は簡素にして嚴かであり、まるで「経」のようである。

子朱子四書注釋、其意精密、其語簡嚴、渾然猶經也。<sup>12)</sup>

この一文から分かるように、趙順孫は朱子の注釈を「経」と見立てており、ここからも朱子学への評価が読み取れる。朱子学は更に科挙によって、学問の「標準」となっていた。その間懷疑的な意見や『集註』に修正を加えるものもあったが、大きな効果はなく、四書学の発展は王陽明が『古本大學』を提唱してから、変化が起こり始めた。

先生は竜場にいらした時に、朱子の『大學章句』が聖門の本旨ではないと疑い、古本を写し、しっかり読み込んで考えを巡らせ、始めて聖人の学は簡易明白であると信じるにいたった。(つまり大學の)書は、ただ一篇であり、経、伝に分かれておらず、「格致」は誠意を本としており、元来「伝」を補う必要がないのである。

先生在龍場時、疑朱子《大學章句》非聖門本旨、手録古本、伏讀精思、始信聖人之學本簡易明白。其書止為一篇、原無經傳之分；格致本於誠意、原無缺傳可補。<sup>13)</sup>

この『年譜』の記載は王陽明の新説の要点を指摘している。一つは、『大學』はもともと一篇の文章であり、「経」と

「伝」に分かれていないこと。次には、「格致補伝」は必要がないということ。しかし王陽明がこの説を唱え始めた頃の弟子たちの反応は懐疑的であった。『伝習録』の序文において徐愛は次のようにいう。

先生は『大學』の「格物」の説などは、旧本が正しいとしたが、これは先儒が誤本としたものであった。私はその説を聞いて始めは驚き、次には疑念を持ち、自分で精力を傾け考え尽くし、(旧本と「章句」を)互いに比較検討しながら、先生に質問した。そしてようやく先生の説は、水が冷たく、火が熱いように(自然で)、百世後の聖人の批判を仰いだ場合でも、困惑することがないだろうと知った。<sup>(14)</sup>

先生於『大學』「格物」諸説、悉以舊本為正、蓋先儒所謂誤本者也。愛始聞而駭、既而疑、已而殫精竭思、參互錯縱、以質於先生。然後知先生之說若水之寒、若火之熱、斷斷乎「百世以俟聖人而不惑」者也。<sup>(15)</sup>

徐愛は、陽明を正しいと見なした旧本は、先儒(朱子)が誤本としたものであったと述べているが、朱子学を標準としていた当時の学术界は当然旧本は誤りであると認識していた。朱子が改訂した『大學章句』はすでに「正本」であり、「經書」のような地位を得ていた。だからこそ、徐愛が初めて『古本大學』が正確だと聞いた時には、驚きと疑念を持ったのである。これが当時の士人の反応であろう。經書として覚えこんだ『大學章句』を『禮記』元の形に戻すことは、すぐに受け入れられるようなことではなかった。実際「徐愛録」の中には、『大學』についての疑問を陽明に質問する箇所が多くある。しかし「大學問」の後に附してゐる錢德洪の記述では、

『大學』の教えは孟子の後伝わらなくなつて幾千年も経っている。良知の彰顯によつて、千年に一度の機会を得て、今日に再び明らかとなった。

『大學』之教、自孟氏而後、不得其傳者幾千年矣。賴良知之明、千載一日、復大明於今日。<sup>16)</sup>

とあり、陽明の新説が受け入れられるようになってからは、弟子たちは朱子の『大學章句』の地位を取り下げ、王陽明こそが孟子の学説を受け継ぐ者だとしている。

王陽明の弟子たちは師の学説を書籍や講会を通して各地に伝え、『古本大學』は陽明門下の「定本」となったのみでなく、『古本大學』を採るか『大學章句』を採るかという議題は他の学者の間にも広まり、改本も出現するようになった。例えば陽明の再伝弟子の李材（見羅、一五二九—一六〇七）もその論著「大學考次序義」で、『大學』には錯簡があると謂い、その順序を校訂したのは程朱である。『大學』には錯簡はないと謂い、古本を援用したのは陽明である。<sup>17)</sup>と述べ、その論著では古本に賛成を示す部分もあり、朱子の改本に賛成を示す部分もあり、両者の意見を参照しながら、自ら改本を新たに作った。<sup>18)</sup>格物補伝については、李見羅は「格物致知」は孔子が「経」を述べたのみで曾子は「伝」を作っておらず、欠落があるわけではないとしている。また、格物致知に伝がないのは『大學』全体がその伝にあたるからだと述べた。<sup>19)</sup>

もう一例を挙げると、上述の許孚遠（敬菴、一五三五—一六〇四）は「古本」を採用すべきだとし、その『大學』に関する主な論著『大學述』の序文において、次の意見を述べている。

『大學』はまず「明明徳」「新民」を言い、「止至善」で取りまとめている。「天下において明徳を明らかにす」から「修身」を本とすることを推し進め、またそれを「格物」から手がけることを推し進めており、その理は非常に明白である。その後の五節に分けて解釈をつけており、「誠意」から始まり、「致知格物」はその中に含まれている。

『大學』首言「明明徳」、「新民」而要之「止至善」。既自「明明徳於天下」而推本於「脩身」、又推始於「格物」、此理甚明。其後分釋凡有五節、始於誠意而致知格物已包括其中。<sup>20)</sup>



短い文字の中で、『大學』の主旨を述べながら、実は「古本」に依拠していることが分かる論述となっている。「古本」の順序とおりに閲読すれば、『大學』の理は明らかであると述べ、「誠意」以後の五節（つまり全部で六節に分ける）には既に「致知格物」が含まれているため、「格物補伝」は必要がないと考える。

「四書学」の発展という観点から朱子から王陽明さらに陽明後学の『四書』に対する理解を見ると、嘉靖～万暦年間（四書学の発展、転換期であったと言える。佐野公治氏は学術史の視野から「新四書学」の概念を提示しこの現象を説明している。<sup>21</sup>）佐野氏は嘉靖～万暦年間（四書学の発展を前後期に分け、前期の四書学も陽明学の影響を受けているが、後期には次の三つの特徴がある）と考える。（一）口承主義乃至著述禁欲志向の稀薄化、（二）経書観、聖人観の変遷、（三）釈老思想を援用した奔放的な解釈。またこれ以外に、後期の『四書』解釈から考証学の芽生えを見て取れるという重要な現象を指摘している。

本論では、上述の研究に則って、嘉靖～万暦年間（四書）解釈を「新四書学」と称し、これを基に次節では明末の『四書』解釈が日本に伝わった以降の受容と影響を論じたい。

## 五、日本伝来後に受容と影響

前節で述べた「新四書学」の観点は、『四書』注釈の関連書籍が日本へ輸入されたと同時に江戸期の漢学者にもたされた。本節では『四書知新日録』を用いた江戸期の漢学者の著作を例に論をすすめる。

江戸の初期は中国の明末清初にあたり、この頃は中国から大量の書籍が輸入されるようになった。輸入量も注目するが、輸入元が浙江を中心としていたことも重要である。このために日本に伝わった書籍には相当多くの陽明学関連の文献や「四書の末書」が含まれていた。<sup>22</sup> 本論で扱っている『四書知新日録』もこの末書類に属する。



管見の限り、『四書知新日録』を最も早く引用したのは林羅山（二五八三—一六五七）の『大學諺解』（又は『大學章句解』）である。<sup>(23)</sup> 林羅山は日本朱子学の開祖と称されるのにふさわしく、『大學諺解』は朱子の『大學章句』に拠って書かれているが、『大學章句』の本文に解説を附している以外にも、「大學本異同」、「大學題號異説」、「明德親民異説」、「致知格物異説」などが収められている。これらの文から当時羅山が注目していたことは以下の三点にまとめられる。（一）『大學』のテキストの論争、（二）「親民」を「新民」と改めるべきか否か、（三）「格物」を如何に解釈するか。これらは全て明代中期から末期にかけて論じ続けられてきた議題である。羅山はこれらの論述で積極的に明儒の注釈を採り入れている。その中には明末の李見羅、許敬菴、林兆恩、管東溟、楊起元などの著述が含まれており、この文献はほぼ『四書知新日録』に拠ったものであった。例えば「致知格物異説」では、漢儒や朱子の注釈や見解を引用した後に、王陽明、許敬菴、蘇紫溪、鄭申甫の説も引いており、王、許、蘇、鄭の説は『知新日録』に拠ったと付記している。

テキストについては、林羅山は朱子の『大學章句』を採った上で、「大學本異同」で以下の11種のテキストを網羅しており、『章句』を定本としている。

- 1 大學古本（禮記）、2 大學定本（章句）、3 大學篆書（方孝孺序 鄭濟仲篆書 王柏 呉澄改本）、4 蔡清本（見蒙引）、5 王守仁本（禮記古本）、6 鄭瑗本（改本）、7 潘潢本（改本）、8 鄭曉本、9 林兆恩本（禮記古本）、10 瞿元立石經古本（魏本）、11 管志道本（賈逵本 與鄭玄本大異）

偽『石經古本』については、林羅山は先ず許敬菴の説を引用する。

許敬菴曰、…最近では鄭端簡（暁）の『古言』に『大學石經』本が記載されており、「物有本末」を「致知格物」の下

に続けている。学者は『石經』を古書だと信じるものが多く、古書では「格物」の「物」は即ち「物有本末」の「物」であると謂っているという。私は『石經』の（『大學』本文の）順序編集を見たが、二千余年経って急にこのようなテキストが出てきたのは、恐らく物好きな人の仕業でないといえないのではないか。

許敬菴曰……近自鄭端簡『古言』内載『大學石經』本、以「物有本末」接「致知格物」之下、學者多信『石經』爲古書、謂古書謂「格物」之「物」斷即「物有本末」之「物」。余觀『石經』編次、殊不可曉二千餘年忽有此本多出好事者之爲云云。

そして自分の見解を「羅山子按……」と後ろに附す。少し長くなるが全文を引用する。

羅山子按ずるに、『大學』篇は『禮記』に収められており、漢代より宋代の初めまで、異論はなく、二程がはじめて表彰し、学ぶ者の入徳の門とした。朱子に至りそれを改正し、『章句』、『或問』と作って、その誤りと欠落部分を補った。それで「古本」と「定本」ができた。古本は「經」と「伝」とに分かれず、「經」「伝」に分けるようになったのは程朱から始まり、宋の天子が朱子が定め註を施した『大學』を学官に立ててから、天下がそれを宗とするようになった。その後門人後学は、その説に従うものが多く、『大全』に引かれている諸儒は皆そうである。弘治、嘉靖年間、王守仁は古本にもとづき、もともと欠落はないと謂い、後に致良知の学を立てたため、諸儒の間で議論が絶えることがなかった。しかし朱子を尊ぶ者は、その説を守って変えることはせず、王氏を慕う者は、良知を談じ朱子を責めた。そして鄭暁が異本を得、それを賈逵本で、本物の古書であると言った。二千余年経ち、この版本は今まで出現しなかったのに、今となってようやく出現したのは、また疑わしいことである。従って許敬菴の云うように、私も信じない。

羅山子按、『大學』篇載在『禮記』、自漢以來至宋初、未有異論、而二程始表章之、以為學者入徳之門戸。至朱子改正

之、作『章句』、『或問』、且補其錯脱。於是有古本、有定本。古本不分經傳、分經傳則昉於程朱、宋天子立朱子所定所注『大學』于學官、天下宗之。其後門人後學、作其說者甚多、『大全』所引諸儒皆是也。弘治、嘉靖年中、王守仁據古本、謂未嘗有缺脱、而後立致良知之學、由是諸儒議論紛紛。然尊朱子者、守其說而不變、慕王氏者、談良知而議朱子。且又鄭曉得一異本、曰是賈達本也、真古書也。雖然二千餘年、此本不出而今始得出、是亦可疑焉。固如許敬庵之所云也、余亦不信也。

ここから分かるのは、林羅山は『石經大學』を信じないというスタンスをとったことと、『大學章句』は古本を「改正」してその「錯脱」を補正したものであるために「定本」であると考えていることである。

明儒の著述は江戸の初期においては中国での最新学説と資料であり、林羅山は朱子学者として、生涯をかけて積極的に新しい文献資料を吸収していた。『大學諺解』の中で陽明学派のもの、ひいては無善無悪節説を主張する楊起元、三教一致を掲げる林兆恩などの説を収録したのは、それが当時の新説だからであり、見聞を広げるために採ったものである。そして『四書知新日録』は林羅山にとって、恰好な資料提供者であったといえる。

次に江戸末期において『四書知新日録』を引用した『大學贖議』<sup>25</sup>について論じたい。『大學贖議』の作者は吉村秋陽（一七九七―一八六六）、名は晋、字麗明、通称重介、広島の人である。十八歳の時に京都へ向かい、伊藤東里について古義学を学ぶ。三十歳の頃から古義学に疑問を抱き、程朱の学を学び始める。学問所での職務を辞め、江戸へ出て佐藤一斎につくことを決め、学問も次第に陽明学へと傾いていった。主要な著書に『大學贖議』、『王學提綱』、『讀我書樓遺稿』などがある。

吉村秋陽の生きた時代は林羅山と二百年以上の隔たりがあるが、『四書知新日録』は以前として『四書』研究時の重要な参考資料となっていた。しかし秋陽がこの書を愛用した理由は羅山とは異なる。その理由を探ってみたい。

『大學贖議』（又は『舊本大學贖議』）は安政二（一八五五）年秋陽が五十八歳の時に完成し（巻首「題言」に拠る）、万延

元（一八六〇）年に刊行。「題言」には、以下のような記述がある。

『大學』は朱子の改本が出てから、世の学者はそれを守り、一文字も変えることがなかった。それで西漢以来伝わってきた旧本は誤本であると斥けられ、三百年余り、旧本が正しいという者はなかった。王子に至って、旧本にもとづいてその学説を証明した。一時それを疑った者は、奇をてらつての異説だと考えたが、旧本はそれより世に再び顕れ、諸儒は相次いでその説を為し、その数は数十家は下らなかった。

『大學』自朱子改補新本出、世之學者恪守其矩矱、不敢措隻辭。於是西漢以來相傳之舊、斥為誤本、莫有肯顧者、蓋三百餘年矣。至王子、專據舊本以證其學焉。而一時疑之者、或以為標奇立異。然舊本自是復顯於世、諸儒相繼為之說者、亾慮數十家。

秋陽は古本を採り、本文は全て『禮記』の「大學」篇に拠っており、その上で自身の見解を述べている。『大學賸議』の首段で以下のように記す。

この（『大學』）篇は古『禮記』より出たものであり、漢の劉徳が献上した孔氏の壁（より見つかった）經書の原文である。もとより一篇であり、「経」と「伝」に分かれてはいない。何れの者が書いたものなのか詳細は記されておらず、程氏が孔氏の遺書だと謂ったことは、確かに変更はできない。

此篇蓋出古『禮記』中、乃漢劉徳所獻、孔氏壁經原文。而自是一篇、無分經傳。未詳其何人所述、程子謂孔氏遺書、則確不可易也。<sup>26</sup>

この一段は「大學」の作者と章分けの問題についての見解を述べている。「大學」の作者については、王陽明が古本を提唱してから盛んに議論される問題となった。「聖人の作でなくても、経書と称することができるのか」という問題が含まれているためである。朱子は作者について、程氏の「大學は孔氏の遺書である」という説を採っているが、さらに経一章は「孔子の言葉を曾子が述べたもの」であり、伝十章は「曾子の意を門人が記した」としている。朱子は経書は聖人の言を記しているから経書であると考えているため、作者は聖人でなくてはならないのである。しかし秋陽は、今となつては誰の記述なのか分からず、「孔氏の遺書」としかいえないとしている。これは直接佐藤一斎の説を受け継ぐものであり、また許敬菴の説でもある。このようなところは佐野氏のいう「新四書学」の経書観と聖人観の変遷の特色を示すものといえる。

『大學』の章分け問題については、朱子は『禮記』の「大學」には錯簡と欠葉の問題があるとし、それらを「訂正」した。『大學章句』では周知のように本文を経一章と伝十章に分けており、この分け方は刊行後に様々な討論を引き起こしている。王陽明が古本を提唱した後、陽明学よりの学者は「古本大學」を採用するようになったが、章分けについては様々な見解が出された。<sup>27</sup>「大學」が『禮記』の一篇であることには議論の余地がないが、章分けするべきか、章分けするなら何章に分けるかなど、それぞれ意見が異なっていた。この流れをうけ、秋陽の『大學臆議』も「古本大學」を採っており、上述のように、「経と伝に分かれない」としている。『大學臆議』の注釈から、秋陽は「大學」本文を六条に分けていることが分かる。分け方は以下のようになっている。

- 一、大學之道〜此謂知之至也
- 二、所謂誠其意者〜此謂知本
- 三、所謂脩身在正其心者〜此謂脩身在正其心
- 四、所謂其齊家在脩其身者〜不可以其齊家

五、所謂治國必先其齊家者、此謂治國在其齊家

六、所謂平天下在治其國者、以義為利也

この章分けは、中国でも多数を占めている訳ではなく、明代では許敬菴が提起したのみである。<sup>(28)</sup>『大學賸議』から秋陽は『四書知新日録』を通して許敬菴の『大學述』を引用していることが読み取れるので、この章分けも許敬菴の影響を受けたものである可能性がある。<sup>(30)</sup>

明代中期以降議論が絶えることのなかった「格物」解釈については、『大學賸議』では、

格とは、「正」であり、「至」である。もとづくべき所にもとづき不正を正して、正に戻る（至る）意味がある。

格、正也、至也。蓋有所據以正其不正、而歸於正之意。

とあり、王陽明の「正す」という解釈と朱子の「至る」という解釈を並列している。秋陽は両者を融合させ、それを自身の学説としたのである。ただ、「格」の字の解釈のみを見ると、朱王の学説の折衷派だと受け取られがちだが、秋陽の「良知説」に対する信念は強く、それが陽明学者と称される所以であろう。なお『大學賸議』の「題言」には、以下の記述がある。

以前朱王は道は同じだが、学が少し違ふと述べたことがある。そうであるが、突き詰めるとやはり同じであり、それは道が同じであるからであつた。お二人は世に名をなす賢人であり、それぞれ自得する所があつて、斯道を發揮したが、その趣が精妙で奥深いために、理解しにくいものがある。学ぶ者はその心を公正にし、その気を平らかにし、心の中で



会得して融合させ、その「同じからず」から「同じ」を見出し自分の糧とすることができて、はじめて善く学ぶことができたと言えるのである。

嘗竊謂朱王道同、而學稍不同。雖然、其究亦歸乎同、以道同也。夫二公名世大賢、各因其所自得、而發揮斯道、意趣精奧、固未易曉。學者苟公其心、平其氣、默識融會、得同於不同以資乎己、乃可謂之善學也。

秋陽はまさに「公其心、平其氣、默識融會、得同於不同以資乎己」という方式で朱子学と陽明学を理解しており、それをもって『大學贖議』を成した。彼が『四書知新日録』を愛用したのは、正に『知新日録』はどれか一つの説のみを採らず、各々の学者の説を残したところに理由がある。従って、二百年前の古い資料でも、秋陽にとっては貴重なものとなった。これは、『知新日録』に対する林羅山の向き合い方とは異なるものといえる。

## 六、結語

『四書知新日録』が中国で後世に伝わらなかった理由の一つに、科挙用の参考書であったために、実用性はあっても学術的には重要視されなかったことが挙げられる。明代中期から末期にかけて、この類の書籍は大量に出版され、『四書知新日録』もその内の一つでしかなかった。しかし、他の「四書末書」と共に日本に輸入されながら、『知新日録』は江戸期の漢学者が愛用する書物となった。

本文の中でも林羅山と吉村秋陽という、時代も思想も違う漢学者を例に、『四書知新日録』の受容についてその一端を論じた。林羅山は朱子学者として『知新日録』を読み、最新の学説を多く収録しているという面でこの書を活用した。その二百年後、幕末の時代に生まれた陽明学者の吉村秋陽は、その修学過程で朱子学、陽明学、陽明後学、更に清朝考証学を



学び、そのうえで『四書知新日録』を愛読していた。それはこの書が一つの学説に偏ることなく、様々な説を採り入れていることを評価したからであった。

『四書知新日録』が主旨に掲げた「温故知新」、鄭申甫は明代万暦年間に記述された「新説」が「故説」となった時に、後世の疑問に答え、新たな学問を築く時に役に立てばいいという願いを込めていたが、この思いは凶らずも二百年後の日本で実現されたといえる。

〔附記〕

本稿執筆にあたり、故大島晃先生には資料の閲覧、撮影などにご高配賜ったのみでなく、貴重なご意見も頂戴いたしました。厚く御礼申し上げますとともに、この場をお借りし、哀悼の意を表したいと思います。

なお、本稿は台湾科技部研究計画「明末的『四書』註釋對於江戸漢學的影響——以『四書知新日録』為研究對象」（103-2410-H-007-035）による研究成果の一部であり、台湾大学人文社会高等研究院「二〇一五年青年學者東亞儒學學術論壇」において口頭発表したものを加筆修正したものである。その際コメントターの陳昭瑛氏、楊儒賓氏に大変参考になるご意見を頂いた。

〔注〕

- (1) 字は「孩如」との説もある（『福建通志』卷五十一）。
- (2) 吉田公平氏は「日本における『伝習録』」（『日本における陽明学』、頁二七―二八）で『知新日録』は江戸の儒学者にとって、明代の『四書』解釈を理解するのに非常に便利な書物であったと指摘する。
- (3) 『文淵閣四庫全書』史部・地理類・都會郡縣之屬。

- (4) 『文淵閣四庫全書』史部・傳記類・總錄之屬。
- (5) 近年中国重慶の西南師範大學より出版された『域外漢籍珍本文庫』第四輯(二〇一三年)の十卷、十一卷に龍谷大學所蔵の『新鐫溫陵鄭如觀靜窩四書知新日録』収録されており、近日閲覧する機会を得たが、本論で扱う四種のテキストと異同が認められる。例えば、各巻首の第一行にある書名は「鐫溫陵鄭如觀靜窩四書知新日録大學卷之乙」、「新鐫溫如鄭先生觀靜窩四書知新日録中庸卷之二」、「新鐫溫陵鄭如觀靜窩四書知新日録上論卷之三」、「新鐫溫陵鄭如觀靜窩四書知新日録下論卷之四」となっており、統一されていない。その詳細については別稿に譲り、ここでは参考のために書影を附す(図5)。
- (6) 靜嘉堂文庫所蔵の版本は未見、目録の記載により同版であると推測する。
- (7) 國家圖書館漢學研究中心所蔵の版本には「版本：日本據明潭城余彰德刊翻刻本」、「資料來源：台大」との記載あり。
- (8) (一)内は筆者による。『中庸』『論語』『孟子』の部分はこの二十人以外に、貢受軒(安國)、李見羅(材)、耿楚侗(定向)、湯海若(?)、聶雙江(豹)、楊復所(起元)、張洞齋(治具)、歸震川(有光)などの言説も引用する。
- (9) 道教を指すか。
- (10) 『四書知新日録』と許敬菴の『大學』解釈との関係については、別稿で論じたい。
- (11) 佐野公治著：『四書學史の研究』(東京：創文社、一九八八年)、頁三一十六参照。「四書學」の概念については他にも辻本雅史：『四書學：暫定性的方法概念』黃俊傑編『東亞儒者的四書詮釋』所収(台北：台灣大學出版中心、二〇〇五年)、頁二八五―二八八。周春健『元代四書學研究』(上海：華東師範大學出版社、二〇〇八)、頁一五なども参照されたい。
- (12) 宋・趙順孫：『四書纂疏』(台北：文史哲出版社、一九八六年)、頁九。
- (13) 『陽明先生年譜』、『明』王守仁：『王陽明全集下』(上海：上海古籍出版社、一九九二年)所収、頁一二五―一二五四。王守仁は一五〇八年に龍場へ行き、一五一八年に『古本大學』を刊行する。
- (14) 「百世以俟聖人而不惑」、『中庸』第二九章。
- (15) 『王陽明全集上』、頁一。
- (16) 『王陽明全集下』、頁九七三。
- (17) 「謂『大學』之有錯簡而考訂序次之者、程朱也。謂『大學』之無錯簡而一循用其古本之舊者、陽明也。」「大學考次序義」、〔明〕李材『見羅先生書二十卷』(『四庫全書存目叢書・子部11』台南：莊嚴文化出版、一九九五年)、頁六八五所収。
- (18) 李見羅の『大學』解釈については、拙著『明末における『大學』解釈―李見羅と許敬菴を中心に』(東京：二松學舍大學博士論文、二〇〇九年)、頁六一―七九を参照されたい。
- (19) 「格致義」、『見羅先生書二十卷』、頁六八三所収。
- (20) 「明」許孚遠『大學述』(萬曆十九年刊本、尊經閣文庫蔵)。
- (21) 『四書學史の研究』、頁三四六―三六三参照。なお、「新四書學」一語については、荒木見悟氏が(『四書湖南講について』)で初めてこの語

を用いた。『明代思想研究』（東京：創文社、一九七二年）、頁二九二―三〇四参照。

(22) 吉田公平：『日本における陽明学』（東京：ぺりかん社、一九九九年）、頁一一九―一二〇。

(23) 林羅山：『大学諺解』三冊（写本、内閣文庫蔵）。『大学諺解』については、大島晃：「林羅山の『大学諺解』について―その述作の方法と姿勢」、『漢文学 解釈與研究』第七輯（二〇〇四年十二月）、頁一―四四を参照。

(24) 原文は「達」である、「達」に作るべきである。

(25) 内閣文庫蔵、萬延元年（一八六〇年）刊本。

(26) 『大學贖議』頁一a。

(27) 李紀祥：『兩宋以來大學改本之研究』、第一章〈古本大學〉（台北：台灣學生書局、一九八八年）、頁二―二九参照。

(28) 上述の李紀祥の研究によれば（注26）、六章に分けることを提唱した学者は、宋代1人、明代1人、清代1人、民國12人である。

(29) 拙著：「明儒許敬菴對『大學』的解釋」、『經學研究集刊（台灣高雄師範大學）』第五期（二〇〇八年十一月）、頁二二五―二二六を参照されたい。

(30) なお、佐藤一斎の『大學欄外書』も『四書知新日録』を引用している。このことについては、また別稿で論じたい。

# 【キーワード】

・新四書学 『四書知新日録』 江戸漢学 漢籍受容 明末思想